

診療室で
今日から
できる!



子どもの 口腔機能を 育てる本



口腔機能発達不全症への対応

千葉歯科医院 浜野美幸 ● 著



ダウンロードして
使える!

啓発用ポスター

+

問診票

+

説明用媒体つき

「知る」「みる」「対応する」の
③ステップでできる!



医歯薬出版株式会社



口がポカ〜ンと
している

待合室で
待っているときに
指しゃぶりを
している



皆さんのクリニックに、 こんなお子さんが 来ていませんか？

発音が
おかしい



この子食べるのが
遅いんです…



食べるのが
遅い



「むし歯はありませんね。また検診に来てください」と言って終了しますか？ それとも…??



本書の対象となる読者はこんな方です

- ☑ 診療室に1人でも口腔機能が“気になる”小児の患者さんが来院している

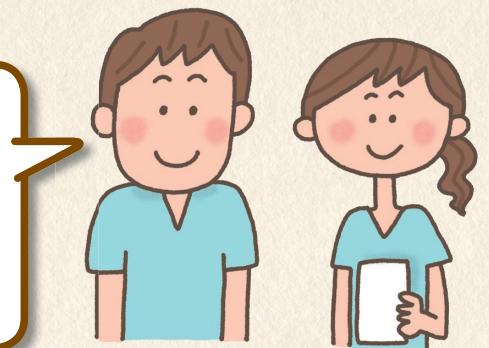
- ☑ 子どもの口の機能をどのようにみたらよいかわからない

- ☑ 「口腔機能発達不全症」という言葉は知っているけれど、具体的にどんな対応をしたらよいかわからない

- ☑ チェアサイドでできる子どもの口腔機能への対応を知りたい

- ☑ かかりつけ歯科医師・歯科衛生士として、口の機能を通して“子育て支援”にかかわりたい

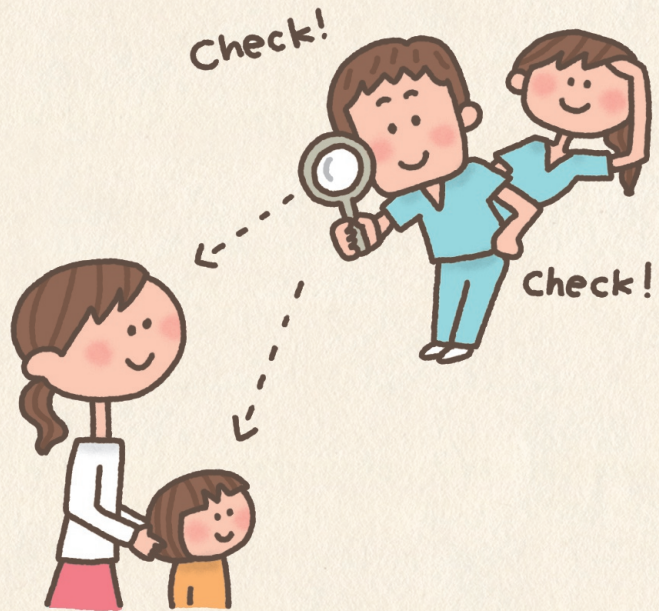
口の機能の問題を察知し、
機能発達のための情報を提供するの、
歯科医師・歯科衛生士の大切な役割です！
子どもたち、保護者はサポートを待っています。



「口腔機能発達不全症」の対象は、 皆さんのクリニックに来院している子どもたち、 地域のすべての子どもたちです。

食べる機能・話す機能などが十分に発達していない「口腔機能発達不全症」(p.20 参照)は、自覚症状がないことが多く、主訴となることは少ないものです。

しかし、歯科医師、歯科衛生士が今までとは違った視点をもつことによって、いつもの診療のなかで「口腔機能」に関連した問題が見えてきます。



たとえば…

口の中から視線を顔全体に広げると

あっ！ 口が開いている

会話のときに発音に注目してみると

あっ！ 舌足らずの発音だ

身体全体にまで視線を広げると

あっ！ 姿勢が悪い

歯科医師・歯科衛生士は、「食べること」に関して専門の知識をもっている職種だからこそ、一步視野を広げて食事のこと、生活のことを聞いてみる必要があります。同時に、子どもや保護者にも「食事やことばの悩みは歯科医院で相談してみよう」と思ってもらうための工夫が必要です。

本書では歯科専門職だからできる口腔機能発達不全症へのアドバイスや支援を紹介していきます。

お子さん、こんなことで **困**っていませんか？

食べるのが
遅い



あまり噛まずに
丸のみしている



指しゃぶりが
やめられない



食べるとき
クチャクチャ音がして
注意しても変わらない



赤ちゃん言葉が
気になる

ぼくごたい！



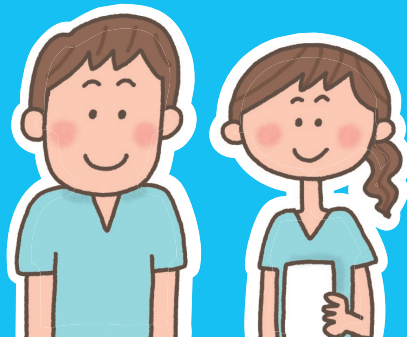
いつも
ポカンと口が
開いている



このようなことはお口の機能の問題が関係している場合があります。また、指しゃぶりなどを長く続けていると歯並びに影響することがあります。

歯科医院は、小児科、耳鼻咽喉科の医師と連携をとりながら、お口の役割である「食べること、のみ込むこと、話すこと」の悩みに対応しています。2018年からは健康保険でも対応できるようになりました。

気になることがありましたら、
私たちにご相談ください！



© 医歯薬出版株式会社



● 付録あり ●

← ポスターはこちらのQRコード、もしくは以下のURLよりダウンロードできます。
待合室に貼ってご活用ください。

URL <https://www.ishiyaku.co.jp/ebooks/445950/01/?qr=t>

臨床ポイント

「口腔機能発達不全症」という疾患名を伝えると、「不全」という言葉に敏感に反応して必要以上に不安に思う保護者も少なくありません。少し配慮して説明する工夫が必要でしょう。過剰に反応してしまうと思われる場合には、あえて病名として告げずに症状を伝えるだけでいいと思います。

ポイントは、納得できる説明を心がけることです。

「だいたい3～5割の子どもたちにみられる」と疫学的な背景を説明し、行うのは特別な治療ではなく、いつもの生活や食事を見直し、筋力の強化のための訓練を行うことだと説明します。



Column 本本当に偏食？～食の問題へのかかわりは、“子育て支援”

小児の食の問題は、保護者にとっては毎日のことなので、悩みにつながりやすいものです。

子どもが「よく噛まない、ため込む、丸のみをする」という悩みはよくみられますが、その原因が口腔機能に起因していることは少なくありません。子どもが食べたものを噛めずに吐き出すと、保護者はその食材が嫌いだと認識し、「偏食」というレッテルを貼ってしまうこともあります。そして、子どもが食べない食材は食卓に載せず、結果的に食のバリエーションを狭め、本当の偏食を作り出してしまふことになりかねません。

私たち歯科医療従事者は、食の悩みが歯や歯列・咬合、口腔機能の問題に起因することがあることを一般の方にも理解してもらえるように働きかけることが大切です。特に保育・教育関係者にはその視点をもって子どもたちを観察し、接してもらうように伝えましょう。また、必要に応じて歯科を受診するよう情報提供していくことも大切です。

子どもたちは取り囲むみんなで育てるものです。そのなかで、「食べること」に関しては歯科医療関係者が中心的な役割を担うことが、子どもの健全な育ちにつながります。

保護者が困っていること

